

Title	鈴木正崇氏学位請求論文審査要旨
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1996
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.65, No.3 (1996. 1) ,p.155(315)- 163(323)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19960100-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

鈴木正崇氏学位請求論文審査要旨

スリランカの宗教と文化に関する 人類学的研究

—シンハラ人を中心として—

スリランカは、民族・宗教・言語を異にする人々から構成され、その多数を占めるシンハラ人は、大半が上座部仏教 (Theravada Buddhism) を信仰している。しかし、仏教には教義仏教と民衆仏教の二側面があり、更にヒンドゥー教と民間信仰が習合し、社会変動や民族抗争の過程で変化するなど複雑な様相を呈している。

本論文は、シンハラ人社会を中心にスリランカの宗教と文化について考察を加え、宗教人類学の新たな展開を目指したものである。主論文は、序章、三部一三章、並びに終章から成り、付論として日本におけるスリランカ研究の動向を加える。全体構成は、以下の通りである。

序章 課題と方法

第一部 村落の儀礼

第一章 調査地の概観

第二章 仏陀と神々

第三章 成女式

第四章 婚姻儀礼

第五章 葬式

第二部 儀礼の諸相

第六章 都市の祭礼—キャンデイ・エサラ・ペラヘラ祭—

第七章 神観念の諸相—デウォルを中心として—

第八章 神々と悪霊の間—ガラー・ヤカーの場合—

第九章 神話・芸能・儀礼に見るナーガ

第三部 巡礼と社会変動

第十章 聖地における宗教の融合と対立

第十一章 民衆文化とエリート文化

第十二章 聖地と山岳信仰

第十三章 王権神話と現代

終章 人類学と仏教

付論 Sri Lankan Studies in Japan

序章においては、複合社会における人類学の研究史を概観し、大伝統と小伝統の理論を展開したインドとスリランカの研究成果を検討する。そして、本論文がこうした先行研究を踏まえて、新しい構想の下でフィールドワークを行って総合化をはかった意図を明確にする。

全体の流れは、第一部で民衆が仏教を取り込んでいく過程と基層文化の諸相を考察し、第二部では、王権や政治が基層文化を利用しないしは操作していく過程を、都市や海岸部の儀礼や象徴の考察を通じて明らかにする。第三部は、民衆が社会変動に揺れ動く現代の状況に敏感に反応して、聖地への巡礼や神話の再解釈により文化が動態化する様相を把握する。

村落での集約的調査に基づいたスリランカの民俗宗教の分析が、第一部では試みられる。第一章において、スリランカの歴史的背景、民族構成、自然環境を概観して、その多様性を明らかにした後に、主たる調査地であるサバラガムワ地方のウドゥムツラの社会状況を述べる。次いで第二章では、仏教の現状を述べる。最初に教義仏教であるが、伝統的には学問中心の教法仏教が主体であり、修行中心の律法仏教に優越していた。しかし、宗教復興運動を通して瞑想を中心とする後者が復活しているという大伝統の変容を論ずる。村落では教法仏教が卓越し、僧侶は教義に基づいて業や輪廻からの解脱・涅槃への到達を目標とするが、現実には教義の概念や理論が様々に変形され、仏陀の觀念が神靈觀と結び付いて変動している。これが民衆仏教である。民衆にとっては涅槃は遠い目標で、功德を積んでより良き再生を望んだり、功德の回向で死霊の苦しみを軽減するという救済の原理があり、布施の行為とピリット儀礼が盛んである。ピリット儀礼は、悪霊を祓い病いや不幸を除くとされる護呪經典の朗誦を主体とする。經典の内容を説くだけでなく、仏陀の力が水・糸・音などの象徴を通して伝えられて、人々の願

いに応えたとされている点で、神信仰に基づく儀礼との共通性がある。仏教と神靈との関連については、村祭りとしてのキリ・マドゥワ儀礼を採り上げて検討し、仏陀を頂点にしたパンテオンがあるという視点を越えて、特定の地域や共同体の世界觀が外来の文化と融合し葛藤を引き起こしている状況を、動態的視点で把握している。特に、パンテオンに世界秩序の分掌(あの世とこの世)に関わる「上位群」と、社会関係の分掌(集団的と個人的)に関わる「下位群」があり、社会変動によりパンテオンが変化することを理論化して示し、大きな枠組みで民衆の世界觀の在り方を提示している。

第三章から第五章までは、シンハラ人の人生儀礼(通過儀礼)が検討される。第三章では、初潮をみた少女の成女式を取り上げて、タミル人や南インドのヒンドゥー文化と共通する要素と、スリランカの在来文化に由来する要素が混淆・葛藤する諸相に焦点をあてて、社会・文化の変動を考察する。儀礼では子供から大人へという社会的地位の変化を示す行為や觀念が明確で、母方交叉イトコ婚が望まれていることから、規定通りに結婚した場合の親族関係の在り方が強調されるとし、成女式が結婚を先取りして示すことを地域の特色として把握する。儀礼ではけがれの觀念が大きな意味を持ち、その除去が願われる。その一方で、けがれを厭わずに守護する神もある。こうしたけがれについての認識は、インドの觀念の影響を受けながらも、変形されて受容されているとする。更に、儀礼では様々な象徴を通じて性への自覚が生まれると同時に、仏教的価値とは対極

にある悪霊の攻撃があると観念され、その恐怖に耐えることを通じて成長するという。少女の理想的人間像が女神として示され、その加護を得る。全体の流れは分離・移行・合体の過程に当てはまり、旅からの帰還という主題もあらわれる。最後に、シンハラ人の子供観にふれ、女性の一生の中での成女式の位置付けを検討して、男性の人生との比較などを通じてその意味を考察する。

第四章では婚姻儀礼を取り上げ、最初にその社会的側面を考察し、儀礼では互酬性による社会集団の連帯と類別が意図され、双方的 (diagonal) 社会での焦点を作り出す形で親族の網の目が凝結し、相互認識する有力な手段の一つとして積極的に活用されるとしている。更に社会的なモラルと規則の確認が行なわれ、交叉イトコ婚の規定、性的関係の厳格さ、処女性の重視、オジの後見役としての在り方などが強調されるが、階層による差異と変化も見られる。婚姻には持参財 (dowry) が必要であるが、この慣行は婚姻形態の変化や貨幣の流通など社会・経済の変動で定着した面も大きいとしている。宗教的側面では、花嫁花婿が神々の来臨に擬せられ、中心になる場が祭壇の役割を果たし、原古の出来事の現前化が見られること、豊饒儀礼の様相があること、分離・移行・合体からなる儀礼の三段階を経て劇的な甦りを果たすことが示される。結論として、豊かな象徴性と意味付けのゆえに、上層階級だけでなく、広範に民衆の支持を得て、大衆化状況の中でこの儀礼が定着したことが明らかにされる。

第五章では仏教の僧侶と民衆が死を介して深く結び付いている葬式を考察し、死をめぐる観念を中心に宗教と社会の連関及びその根底にある世界観を明らかにする。儀礼の分析から、僧侶はこの世とあの世の接点に立ち、より一歩あの世に踏み込んでいるという新しい観念を出す。葬式を功德を積む機会とし、そこに現われる非日常性を指摘し、この世とあの世を媒介する象徴や儀礼の意味についての僧侶と民衆の解釈のずれを検討する。次に、儀礼の過程を五段階に分けて、宗教的領域と社会的領域の関連を見ると、後半部で社会的領域に強調点が置かれ、最後にオイが火葬の薪に点火することに見られるように、宗教的行為を通じての親族関係の確認がなされて、現世での関係を重視する姿勢が顕在化する。一方、死と結び付けられる悪霊の儀礼や起源神話に注目すれば、仏教的世界観とは別の死の見方があらわれる。それは、死と再生、或いは自然に戻る、自然を介して活性力に与って再生する思考である。現世からよりも他界からの視点、仏教だけでなく非仏教的視点を取り入れて、シンハラ人の死の観念をより広く捉える可能性が論じられている。

第二部では、村落を越えた広がりを持つ都市や海岸部の儀礼、個性的な神や悪霊の諸相、凶像の象徴性が考察される。都市を代表する祭りとして、第六章で旧王都のキャンデイの仏歯寺を中心として、エサラ月に行なわれるペラヘラ祭を取り上げて考察が展開される。民衆にとって仏陀は歴史的存在で追憶的な崇拜対象だが、現世利益には関心をもたないとされる。しかし、その一方で、仏陀は超越的存在とも見做され、階層的パンテオ

ンの頂点に位置付けられて神々を統括し、神々が力や正当性の権威移譲により、現世利益に応えんとする。仏陀に関わる聖遺物は、このような多様な仏陀観を同時に満たす可能性をもつという観点を提示する。仏齒の由来を述べ、祭りの記録を辿って、その中に表出される王権の象徴性や王国の秩序を探る。ペラヘラ祭はかつては神々が主体であり、農耕儀礼としての性格が見られ、神木の働きや水切りの儀礼には自然界との交流が表現される。ペラヘラ祭の意味を、その起源伝説から、善と悪の抗争、豊穰祈願だけでなく、政治の変動と関連付け、今日の祭りが民族と国家の問題を抱え込み、文化を实践面で変容させていく原動力になりうることを示唆している。

南西海岸部で祀られるデオオルを中心にして神観念の諸相を考察した第七章では、外来者で強い力をもつというこの神が近年に急速に信仰を集めてきた様相を検討して神体系の動態を探る。信仰の中心地シーニガマで著者が集めた伝説や、そこで行なわれる火渡りやのろいを掛ける行為などを通して、この信仰にはケーララからの移住者の記憶、異人や外部へのイメージが累積していることが明らかにされる。シンハラ人の神霊から悪霊に至る階層化されたパンテオンの中を五層に区分し、この神を二層から四層にわたる大きな振幅をもって位置付けて、神と悪霊の間を動く流動性があると見る。この神の持つ流動性が、社会変動にあたって伝統的世界観の再解釈を生じさせる意味の準拠枠として大きな役割を果たすことを予想する。儀礼や伝説の形成には、文化系統の異なるものとの接触、外来と土着の勢

力の反発と融合、海と陸の境界部の意味付け、商業民の渡来に関わる記憶、生業形態の異なるもの同士の間での相克、他者性の問題など様々な要因が絡んでいることが考察される。最後にその特徴を、人から神への移行とその背景、力の強調とのろい、人・神・悪霊の相関関係と仏陀、人間と悪霊の中間領域、神々の相補と対立、周縁的聖地、歴史的背景という七点をあげて浮き彫りにする。この神を通じて、繰り返される移民の波の中で形成されたシンハラ人の微視的な歴史を見出すことが出来るとしている。

神々よりも低い地位に置かれて人間に対して敵対するものに悪霊（ヤカー）がある。第八章では、悪霊のうち神々と近い関係にあるガラー・ヤカーを考察する。一般に悪霊は人々に病氣や不幸を齎らすと信じられ、仏教の倫理観を破壊したり擲擧したりする反社会的存在である。そのうちでも、儀礼の最後に登場して滑稽な仕草や語りをして、ドーサ（障り）やウアス（罪・穢）を祓う役割を担うのがガラー・ヤカーである。ドーサは、神霊・悪霊・星神などによる外的ドーサと人間の身体の体液の均衡に関わる内的ドーサに分かれ、儀礼では外的影響を統制することで均衡を保つという意図が見られるという。村祭りを主体にガラーの踊りの諸相を見て、起源神話を分析し、儀礼と神話を通じて、神と悪霊の間、過剰性、近親相姦、病氣観、自然と人間、という五つの観点からガラーを考察する。神話では近親相姦という最大の禁忌違反を犯すことで罪やけがれ、つまりウアスが発生し、それを全面的にガラーが引き受けること

で免疫性を獲得して、ドーサやウアスを除去する役割を果たすと結論づける。

スリランカではナーガと呼ばれるコブラが、神話・儀礼・芸能に登場する。この象徴を通じてあらわれる観念や図像、仮面の形態や儀礼行為などを多面的に考察したのが第九章である。

『マハーワンス』(六世紀に成立した王統編年譜)の記述を検討して、神話のナーガは蛇・人間・王・神通力を持つ者・霊的存在とされ、その性格は両義性と可変性を持ち、内容は対抗するものとの関連で変化すると論じている。しかし、ヤツカ(夜叉)に比べると仏教への帰依の度合いが強い。神話はシンハラ人にとっては現代まで連続性を保ち、その意味付けは今も生きており、ナーガは神話と現実を繋ぐものとして作用する。著者は、造形の中にあらわれるナーガを仏教系、ヒンドゥー系の双方から検討し、現代への影響を探る。特に、南西部の沿岸地域のコーラムという仮面芸能の中のナーガの造形に注目する。仮面では、ラークシャ、デーワター、ガラー・ヤカーにナーガが付けられているが、これらはいずれもシンハラ人の世界認識、つまり天界、夜叉界、人間界の三つの世界の境界的存在で、界を逸脱または乗り越える状況でナーガが造形されると見る。仏教の修行僧がナーガと呼ばれるのも人間が修行して仏陀に近づく場合であり、下位に位置付けられた悪霊や神が上昇していく状況でナーガが造形される過程と類似すると見ている。儀礼の中にあらわれるナーガとしては、フーニヤンという蛇を巻き付けた霊が女性に憑依して、蛇に見立てたもつれ髪を神の恩寵とし

て与えられたと信じるようになった女性の行者達を考察する。この事例では、通常は悪霊がついたと見做される憑依の負の側面を正に転換して、守護霊とするのであり、シャーマニズムが蛇の象徴の可変性を利用し、社会変動と連動して儀礼を変化させてきた状況が明らかにされる。

第三部は、植民地化と独立を経た社会状況下で大きく変貌を遂げた巡礼と聖地を取り上げて、広い視野から国家や民族の動態を明らかにする。民族・宗教・言語が異なる信仰者が共有しあう聖地カタラガマは、民族対立の激化にも拘らず、最近までシンハラ人仏教徒とタミル人ヒンドゥー教徒が共存し、その後にはイスラーム教徒も加わるようになった。その理由を第一章で考察している。聖地が三部分に分かれて再編成されていく過程や、巡礼者が聖地を移動する道筋の意味を探り、各地で神話の原初の時空間が現われることを明らかにする。聖地を経巡ることが通過儀礼になぞらえられ、巡礼者がその行為を体験することで、神話の中の神と一体化したと認識出来るようになる。祭祀では神婚譚が再現され、可視化された祭りを通じて神の技を現前化させる。こうした追体験の重層化が、巡礼の価値を高めるのである。最近の傾向として仏教徒の増加や政府主導の聖地の整備、仏教側からの神話解釈、祭祀の仏教化等の新しい動きが起こってきていることを指摘する。民族対立があるにも拘らず、聖地では融解状態としてのコムニタス、特に規範的コムニタスの発生があるという。タミルとシンハラの違いを乗り越える民衆の意志の中に民族の行方を探っている。

第一章では、聖地カタラガマをめぐる民衆とエリートの動態を通じて、相互の文化の社会変動下での変貌を考察する。特に、世俗化の考え方を批判して、宗教や信仰が近代化の進行に伴って衰退するのではなく、意味を組み替え、象徴を再解釈する点に注目する。民衆とエリートの双方が関わるヒンドゥーイズムに焦点を置き、仏教徒が聖地巡礼に積極的に出掛けるようになった理由を、新しい目標達成の為に伝統的道筋を利用して再創造する過程であるとする。聖地での民衆文化のコミュニケーションの在り方を、社会組織・倫理・儀礼の変化を通じて考察し、儀礼を憑依、バクティ（信愛）、カーウアディ（奉納儀礼）と性、象徴の実践化の四つの観点から見ている。都市に流れ込んだ民衆が中・下層階級となり、苦悩や抑圧、性への不満が宗教的な方法によって表現されて、男女の文化的役割を変貌させていくのである。一方、エリートの文化は宗教復興運動をナシヨナリズムと結びつけて大衆化させ、積極的にカルトを形成して祭祀に関与していく形で変貌を遂げると論じられている。

第二章では、カタラガマと並ぶ有名な巡礼地、スリー・パードを主体に、聖地と山岳信仰の結び付きを探り、その変化の様相を明らかにしている。スリー・パードは山頂にある聖なる足跡で知られ、仏教徒、ヒンドゥー教徒、イスラーム教徒、キリスト教徒がそれぞれ、仏陀、シヴァ、アダム、聖トーマスと関係付けており、民族や宗教を越えて信仰される聖地である。その開山伝承を述べ、巡礼と足跡の変遷を時代ごとに特徴付け

ながら辿る。総じて、スリー・パードは、カタラガマに比べて静態的であり、民衆の支持があるものの、山の神のサマンが仏教に帰依する度合いが高く、慈悲深く、功德積みが主体で社会変動との結びつきが弱い。サマンには現世利益に直接には関わることが少ないという仏陀に類似した状況が生まれている。流動的な神霊との関係をどう結ぶかが、今後の活性化に繋がる分岐点となることを示唆する。一八世紀にはスリー・パードやカタラガマも含めた仏跡十六カ所が設定されるが、初期には王権の関与が大きく、ナシヨナリズムの活性化に伴って興隆した。

島が仏陀によって仏教の繁栄を約束された土地で、その主人はシンハラ人であるという思考法が広まると、それにうまく適合する聖地として政治的な意味を強く帯びるようになったという。現代では、旧王都が復活して、巡礼地に含められ、農民の巡礼が盛んになるなどの動きが見られる。スリー・パードは山岳信仰という核を持ち、足跡という隠された象徴を持つゆえに、その聖性を維持してきたが、現在では仏教と国家との関係の結び方が問われており、巡礼や聖地の意味の変容が迫られている。

現代においてもスリランカでは神話が強い意味作用を及ぼしており、国旗のデザインなどに大きな影響を与えている。第三章では、近代国家の中で新たに息を吹き返した建国神話を中心に、民族対立も絡ませながら、創られた伝統の行方を探る。国旗の由来やシンハラという民族の成り立ちを、エスニシティの観点をに入れて考えると、その表出的役割が手段的役割に変化してきた状況を見ることが出来るし、『マハーワンサ』の再解

釈が転回点になっていたことがわかる。この文献の構成を考察し、仏教と王権の関係を問い直す。また、神話の通時論的考察から歴史の変遷を探り、共時論的考察から王権の発生を語る論理を抽出する。中心と周縁、外部性、反倫理性、非日常性、野生の力の介在がその特徴であり、特に外部性の問題が重視される。現実的外部と観念的外部のせめぎあいがスリランカの歴史を構成し、王権の意味付けを変えていく。一九世紀の後半に『マハーワンス』が再解釈されて、民族・社会・宗教を一体化した新しい民族概念が生み出され、シンハラ・ナシヨナリズムがこれに基づいて展開し、独立以後にも大きな影響を与える。

こうして形成された我々意識が他者との差異性を作り出し、民族対立を引き起こすのであり、その原点として神話があったといえる。神話が民族対立を激化させたり緩和したりする意味の準拠であることを、批判的に捉える必要性が提起されている。

終章では、再びシンハラ人の大半が信じる仏教と人類学の関係を研究史を踏まえて検討して研究上の問題点を探る。ここでは複合社会を対象とした時の変動の組み込み方、歴史文献の扱い、文字の機能、多様な知識のレベルなどの考察を通じて、小さな社会だけでなく大きな社会、つまり国家や民族にも積極的に取り組む必要性を示すとともに、将来の比較研究の可能性を示唆した。最後に、付論として一九四〇年から一九九三年までの日本におけるスリランカ研究の推移を述べ（英文）、これからの研究の在り方について検討を加えた。以上が本論文の概要である。

シンハラ人社会を中心に、スリランカの宗教と文化を考察した鈴木正崇君の本論文は、村落の儀礼を様々な視点から捉えた上で、都市や聖地の個性的な神々や悪霊、象徴などを考察し、更に広い視野から社会変動下の巡礼の諸相を研究し、最後に国家や民族の行方を考えたスケールの大きなものである。本論文に関しては以下の諸点が注目されよう。

第一に、一般に、文化人類学においては、小地域社会の微視的な調査と分析に終始する傾向が顕著であるが、本研究は村落に止まらず、都市・民族・国家との関わり合いにも分析のメスを加え、新知見を得た点が高く評価される。但し、その野心的試みは、サバラガムワの村落とキャンデイなどの都市に歴史的展開や社会構成の違いがあることから、相互の連関にやや整合性に欠ける点が認められること、特に複雑な機構を持つ国家の分析には、文化人類学の成果が十分に生かされる迄に至っていない点が、今後の課題として残されている。

第二に、分析の方法として、レッドフィールド (Redfield) の理論を援用し、それを見事に組み替え、社会形態学的分析を乗り越えている点が注目される。とりわけ、従来の理論が大伝統と小伝統の二分法的発想に基づき、「農民社会」(Peasant society) の存在を認識した後でも、その理解は受動的な域に止まり、その内容も「部分社会」(Part-society) と「部分文化」(Part-culture) と見て、都市中心の視座からなされ、主体的には把握されていなかった。ところが、本論文では農民社会の伝統を積極的に捉えて、社会変動の動きを勘案しつつ、

動態的分析を展開していることが評価される。しかし、分析がやや図式的になつていたりすることや、人類学や宗教学の理論枠組みが先行している点を再検討する必要がある。また、大伝統と小伝統の概念を宗教理解の枠組みとして使用して民俗宗教を理解する場合には、仏教とヒンドゥー教と民間信仰の三層からなる混淆形態という把握の仕方ほかに、民俗仏教という概念を入れて分析することも可能である。ピリット儀礼の分析にはこの観点をもっと生かされてよいと思われる。

第三に、従来は十分に研究蓄積が無かつた成女式・婚姻儀礼・葬式などの人生儀礼が緻密に記述され、それに構造分析や解釈人類学による象徴の解説が加えられて、動態的な理解が可能になつたことが評価される。神々の儀礼の過程や王権のシンボリズムの読み解きにおいても、階層分化など社会の動態に言及し、従来の研究の水準を大きく越えるものと言える。その一方で、解釈の根拠になる民俗概念の解釈について、やや恣意的な部分も見受けられるので、在地の人々の思考や文脈を重視するという原点を維持し今後の研究でモデルを検証していくことが望まれる。特に、デウォルやガラーの伝説や神話と儀礼の分析は、より説得力のある説明が必要であろう。また史料など歴史文献の取り込み方も今後の課題である。

第四として、特に聖地カタラガマでの祭祀及び巡礼の分析はユニークで見るべきものがある。植民地支配を経て独立後の国家形成が進む状況、急速に進む都市への人口集中、階層分化による中産階級の成立など目まぐるしく動く変動状況で、激増し

た貧しい民衆の社会的不満のはけ口としての機能に関する分析は見事である。しかも、民衆とともにエリートも関与して、同じ儀礼行為を独立後の国民形成の統合的価値観としての仏教化の推進に利用したという指摘は、極めて興味深い。その結果がシンハラ・タミルの民族対立の合理化に結びついたことを指摘して、今後の民族の行方を検討する視点には、文化人類学の枠組みを越えて現代の問題に接近しようとするスケールの大きさが感じられる。

最後に、本論文の総合的評価として、シンハラ人社会の宗教と文化に関して、大胆な理論的接近を行い、しかも、相互作用 (interaction) の理論に基づく目配りが十分になされている。マリオット (M. Mariott) の概念を使えば、スリランカにおいての大伝統の局地化 (parochialization: 普遍的要素の下降過程) の分析に優れた成果を挙げていると言える。但し、次の課題として小伝統の普遍化 (universalization, 土着・地域的要素の上昇過程) についても、本論文と同じような精緻な接近が行われることを期待したい。

本論文は、以上述べてきたようにスリランカのシンハラ人社会に関する包括的研究であり、フィールドワークや文献による周到な資料収集、並びに鋭い分析と深い理論的蓄積を持ち、日本における南アジア研究に大きな進展を齎らしたと評価出来る。なお、著者はスリランカ研究と合わせて、東アジアの民俗宗教も視野に入れて調査研究を行なっており、日本については『日本の民俗社会における祭祀と世界観の研究』と題する副論

文を提出している。ちなみにこの論文は、地域社会の空間論、国家の祭祀、山岳信仰と修験道、民俗芸能など多岐にわたるもので、巻末には詳細な研究動向が付されている。スリランカでの成果も、日本との比較の視点によって得られたのであり、今後の更なる展開が期待される。

以上述べてきたような審査の結果により、著者は本論文によって文学博士の学位を受けるに値するものと認められる。

論文審査担当者

主 査 慶應義塾大学文学部教授

大学院文学研究科委員

可 児 弘 明

副 査 慶應義塾大学文学部教授

大学院社会学研究科委員長 文学博士

宮 家 準

副 査 東京工業大学名誉教授

桜美林大学国際学部教授 法学博士

飯 島 茂

学力確認担当者

慶應義塾大学文学部教授

大学院文学研究科委員

可 児 弘 明

(平成七年三月七日授与)